

【研究ノート】

星学祭におけるゼミ活動発表の報告
—プロジェクト方式のゼミ運営への試み—

野 本 啓 介

研究ノート

星学祭におけるゼミ活動発表の報告 —プロジェクト方式のゼミ運営への試み—

野 本 啓 介
Keisuke NOMOTO

目次

1. はじめに
2. プロジェクト方式のゼミ運営とは
3. 前年度までの経緯・試み
4. 2019年度の実績：経緯
5. 2019年度の実績：テーマ・内容
6. おわりに：今後の課題と展望

1. はじめに

本稿の目的は、経済学部経済学科において著者が担当するゼミ（以下、「当ゼミ」）における、プロジェクト方式のゼミ運営への試みの一部について報告するものである。この試みには、いくつかの段階や内容があるが、本稿では2019年度に行った星学祭（大学祭）におけるゼミ活動発表について取り上げる。

まず、学科における当ゼミの位置づけを整理する。当学科は「経済学科」であるが、国際関係、グローバル社会や国際協力に関する講義・ゼミ科目を一定数設置しており、経済学ではなく国際関係論・政治学をベースとする教員が著者を含めて数人在籍している。2018年度のカリキュラム改訂において、経済学系の2コースに加えて「グローバル社会コース」を新規に設置した。同時に、ゼミについては、それまで2年次後期から4年次までの2年半だったものを、2年次から4年次の3年間に変更した。

このようなゼミの位置付けのため、経済学系のゼミであれば1年次の必修科目等で基本的な知識や理論を習得した上でゼミでの学びを始められるのに対して、当ゼミを含むグローバル社会コースのゼミでは、ゼミ内において当該分野に必要な基礎知識や理論をまず学んだ上で実際のゼミ内容に進んでいく形となっている。

こうした趣旨で原稿をまとめるのは本稿が初めてであるため、ここではプロジェクト方式の考え方や趣旨、経緯に重点を置き、その試みの1つとして2019年度に行った星学祭でのゼミ活動発表を紹介する。今後、星学祭における発表以外のさまざまな「プロジェクト」についても、進捗状況に応じて随時報告していく予定である。

2. プロジェクト方式のゼミ運営とは

本稿（当ゼミ）における「プロジェクト方式」とは、厳密な定義があるわけでも、定め

ているわけではないが、概ね次のようなゼミ運営の方法を指す。文献講読による受け身の知識や理論の習得をメインとするのではなく、教員の指導を受けつつも学生たちが主体的に学ぶ内容を決めて実施・実行し、知識や理論に加えてそのプロセス自体を学びの対象・目的とするもの。主体的に動きながら学ぶ、「教わる」のではなく「学ぶ」という言い方もできる。

(1) 背景としての「サブ」と「ロジ」

この方式の背景の1つとなっているのは、行政官庁で主に使用されている「サブ」と「ロジ」という考え方である。「サブ」とは、サブスタンスの略であり政策の中身を指す。「ロジ」とは、ロジスティクスの略で「サブ」を実現するための手続き一式を指す。例えば、外交における交渉や国際会議においては、交渉や発言、取りまとめられる(取りまとめた)文書等の内容が「サブ」であり、交渉や会議の日程調整、移動(旅行)手段の確保、資料の作成・印刷などが「ロジ」となる。

このように説明すると、ただの雑用であり重要性は低い、それを考慮する必要はない、と思われてしまうかもしれない。もう1つ、入学試験(の受験)を例として示しておく。入学試験の受験において、合格を目指して勉強すること(勉強した内容)が「サブ」であり、指定された時刻に指定された場所(試験会場)にいること(いるための手配をすること)が「ロジ」である。どんなに勉強して学力が高くても、時間通りに試験会場にいないれば受験はできず、当然合格することもない。

まずは「サブ」が重要であること、「サブ」がなければ話にならないことはもちろんであるが、「サブ」と「ロジ」は車の両輪同様であること、「ロジ」が「サブ」を決定したり変更させたりする場合もあることに注目する必要がある。

著者は、以前の実務経験(後述)の際、外

交や国際協力のごくごく一端に携わったことがあり、その際にサブとロジの不可分性、(サブはもちろんのこと)ロジの重要性を認識することができた。

(2) プロジェクト方式を採用する理由

当ゼミにおいて、こうした方法を採用する理由は大きく3つに分けられる。これら3つはそれぞれ別個に独立したものではなく、お互いに影響して絡み合っている。

第1は、学生側のニーズである。学部主体の中堅大学である本学においては、学生のほとんど全てが卒業後に実務の世界へと進んでいくこととなる。研究職や、ゼミで扱う分野の専門知識や理論を直接の目的や手段として用いる進路ではないことから、学生の興味を惹きつけゼミで学ぶモチベーションを上げるためにも、文献講読メインによる知識や理論の習得のみに止まることなく、様々なゼミ運営の工夫が必要とされる。一方、学生のモチベーションを高め、学びの効果を高めるためには、達成感や成功体験を学生自身が実感することも非常に重要となる。少なくとも経験上、文献講読や専門知識・理論の習得においては、こうした達成感や成功体験を学生が明らかに実感することは難しい。その点、ここで試みているプロジェクト方式であれば、仮に専門知識や理論の面での実感が薄くても、自分たちで考えて計画し実行していくというプロセスを通じた学びにより、達成感や成功体験を実感することが比較的容易であると考えられる。さらに、こうしたプロジェクト、特に星学祭でのゼミ発表のような大掛かりなものにおいては、グループワークにおける役割分担を行うので、個々の学生の得意・不得意や好き・嫌いなども踏まえた様々な側面・視点での達成感や成功体験を得ることが、より期待できる。

第2は、当ゼミのテーマ・内容による。当ゼミでは、テーマとして「グローバル社会・

国際協力」を掲げており、著者のゼミ以外の担当科目（2018年度カリキュラム）は、「グローバル社会論2」、「グローバルガバナンス論」、「国際協力論1・2」、「海外実習2」である。各分野を、理論、歴史、政策という3つに分類することがあるが、当ゼミではこのうちの政策に重点を置いている。歴史的な背景や理論的な枠組みは当然重要であるが、これらを踏まえつつ政策面を重視する、政策志向の視点でグローバル社会や国際協力の現状や課題を捉え、考察することを目的としている。ここでは、ある課題に関してどのような解決策（政策）が望ましいかという視点ではなく（それにとどまらず）、その政策を実現するためにはどうしたらいいか、また、その政策が実現されない（できない）としたら何故なのか、という視点を重視する。このような視点は、当ゼミで展開しているプロジェクト方式と親和性が高いと言える。

第3は、担当教員（著者）の経歴・バックグラウンドである。著者は、本学への赴任以前に、現在の研究テーマや教育内容に直接関係するもの、および直接は関係しないもの、双方の実務経験を有している。本稿の趣旨ではないので実務経験の詳細は割愛するが、こうした著者の経歴・バックグラウンドが前述の学生側のニーズとも相まって、プロジェクト方式が重要だと考えてゼミ運営に採用している理由の1つとなっている。

なお、当然のことながら、この方式を採用しているからと言って当ゼミでは文献講読を行わないとか、文献講読を軽視したり否定したりするものではない。文献講読による基礎的な知識や理論の習得を行いつつ、それだけでは補えない部分をプロジェクト方式によって補完することを目指すものである。

3. 前年度までの経緯・試み

当ゼミにおいて、本格的にプロジェクト方

式のゼミ運営を開始したのは2019年度である。これは、2018年度に改訂された新カリキュラムにおけるゼミ（2年次）が開始された年度に当たる。

これ以前にも、当ゼミにおいては暫定的、部分的にプロジェクト方式と同様の試みをいくつか行ってきた。ここでは、そのうち星学祭に関わるものを簡単に振り返っておく。

過去5年間ほど、ほぼ毎年、星学祭におけるゼミ活動発表を行ってきた。ただし、今年度のように、はっきりとプロジェクト方式を掲げてゼミのメインに位置付けることができなかったため、発表のテーマや内容、およびゼミ活動全体における星学祭発表のウエイトは年度によってかなりばらつきのあるものとならざるを得なかった。

その理由は、主に2つである。

第1は、ゼミが2年次後期から4年次の2年間半だったことである。星学祭は毎年10月の上旬に行われるため、9月中旬に初めて授業を行う2年次ゼミが参加することは事実上不可能である。また、この点は現在でも状況は変わらないが、4年次ゼミについては就職活動への配慮などがあるため、本格的な参加や過度の負担を求めることは難しい場合がある。このため、事実上、3年次ゼミのみの参加となってしまい、発表を行う場合もテーマや内容に制限をせざるを得なかった。また、2つまたは3つの学年が同時並行で作業を行うことによって、下級生が次年度の様子を思い描いたり上級生が下級生を指導したりするなど、ゼミ内での問題意識やノウハウの共有・継承がほぼ不可能であった。

第2は、カリキュラム上の位置づけにおいて、当ゼミのテーマ・内容と関連の深いグローバル社会や国際関係に関する分野の科目のウエイトが低かったことである。カリキュラムの細かい点についての説明が必要になるため詳細は割愛するが、国際関係や国際協力に関する基礎的な知識や理論の習得を他の講義

科目に任せることなくゼミ内で対応せざるを得なかったため、星学祭の発表などの諸活動には時間的にも教員・学生のエネルギー的にも手が回らない状況であった。

こうした中、2018年度のカリキュラム改訂によって、これら2つの問題が解消されたことにより、今回の本格的なプロジェクト方式の導入に至った次第である。

4. 2019年度の実績：経緯

今年度は、プロジェクト方式を本格的に開始した初年度のため、教員・学生ともまだまだ試行錯誤ではあるが、次のような経緯で作業を進めてきた。

(1) 年度初め

4月の時点で、星学祭参加の趣旨や目的を説明し、ゼミとして2年生チームおよび3年生チームの2つでゼミ活動発表を行うことを決定した。2年生は、ゼミとして顔合わせをした直後でもあり、当初、学生たちは反対や不満ということではないものの趣旨を理解するまで時間がかかったようであった。しかし、その後、クラスとして合意に至ることができた。一方、3年生は、前年度から趣旨や計画を大まかに伝えていたこともあり、非常に前向きに参加の合意を得ることができた。

(2) 6月中旬まで

6月中旬が星学祭への参加申請の期限だったため、このタイミングを目処に各チームのテーマ検討を行った。2年生については、ゼミ開始直後であるため、まずはクラス内のコミュニケーションや人間関係を徐々に深めつつ議論を行った。また、グローバル社会や国際協力についての基礎知識についても学び始めたばかりでほとんど蓄積がないため、テーマとゼミの専門分野との関係に過度にこだわることなく、学生たちの興味を尊重しつつ検

討を行い、テーマの決定・合意に至った。3年生については、昨年度の半期だけではあるものの専門分野の蓄積があり、またクラス内のコミュニケーションも十分であったため、2年生と比較すると教員の関与の度合いを大幅に小さくして学生の自主的な議論でのテーマ検討を促した。その中で提示された3つの案を教員と3年生チームとで検討し、最終的にそのうちの1つにテーマが決定した。

(3) 前期末まで

テーマの決定を受け、各チームが具体的な内容の決定に着手した。この段階では、具体的な発表（掲示、プレゼンテーション）の方法などを考慮するのではなく、まずは各チームがグループワークによって共同でレポートを作成することをイメージして作業を行なった。

それとともに、これ以降、星学祭当日までに行うべきことを「サブ」および「ロジ」の両面からリストアップし、スケジュールを自分たちが実行するべきもの、実行可能なものとして作成した。

(4) 夏休み中

前述のスケジュール作成の際、星学祭当日に到達しているべき内容やレベルを示した上で、それが実現できるのであれば具体的なスケジュールリングは学生の自主性に任せる、いつ何をやるかは細かく指示しないという方針とした。その結果、学生たちは夏休み中に行う作業は最低限のものに限り、後期開始後の星学祭当日までの1ヶ月弱の期間に集中して作業を行うことを選択した。

(5) 後期開始から星学祭当日まで

後期の授業開始から星学祭当日までは、約1ヶ月の時間が残されていた。後期のはじめに、当初予定していたスケジュールと、その時点での進捗状況とを比較し、やるべきこと

を改めてリストアップした上で残された時間を逆算しつつ、スケジュールの修正を行った。それ以降はスケジュールに基づいて粛々と作業を進め、星学祭直前のゼミ授業において発表内容およびプレゼン（掲示）方法を確認し、本番に臨んだ。

5. 2019年度の実績：テーマ・内容

上述の経緯を経て、今年度のテーマおよび内容は次のとおりとなった。

(1) 2年生チーム

テーマは「日本の広報文化外交」、キャッチコピーは「NIPPON KITE-KUDASAI～日本の広報文化外交～」であった。

2年ゼミのメンバーの一人が、国際交流基金が実施している「日本語パートナーズ⁽¹⁾」に興味を持って応募を検討していたことをきっかけに、教員のアドバイスをもとに学生間で検討してこれに決定した。

この分野の学びを始めたばかりの2年生にとっては、国際関係・国際政治や外交という安全保障や経済に関するもので堅いもの、縁遠いもの、自分とは関係が無いものと捉えられがちであるが、こうした分野も国際政治や外交の対象として含まれること、一見すると関連が無いように見えることでも視点を変えれば繋がりが見えてくること、を実感させるには最適のテーマであった。

「日本の広報文化外交」という大テーマの下に、「日本語」、「日本食」、「アニメ・漫画」という3つの小テーマを設定して、それぞれについて、(1) 外国でどのように受け入れられているか、なぜ人気があるのかという現状、(2) 日本政府が外交や日本文化アピールに関して各分野において行っている政策、(3) それを踏まえて自分たちが考える提言、の3点について取りまとめた。

(2) 3年生チーム

テーマは「映画から考える難民問題」、キャッチコピーは「星学祭参加者よ、これが難民問題だ。～映画から考える難民問題～」であった。

3年ゼミのメンバーの一人が映画に強い興味を持ち詳しくあったことから、映画を切り口とすること、何らかの形で絡めることはわりと早い段階から決まっていた。

難民問題は、国際政治や国際協力においてオーソドックスではあるものの非常に重要なテーマである。ここでは、時間軸をもとに、そして対象を拡大して、(1) 紛争や経済的困難などの難民が発生する背景や要因、(2) 難民の置かれている厳しい状況と支援、(3) 難民が定住等をした後に難民自身やその社会がかかる問題、の3点に分けて取りまとめた。

6. おわりに：今後の課題と展望

今年度の星学祭におけるゼミ活動発表を振り返ると、学生たちは趣旨を踏まえて自主的に「サブ」と「ロジ」両面での作業を自分たちが作成したスケジュールに基づいてきちんとこなしていた。プロジェクト方式採用の初年度として、仮に内容が不十分であってもとにかく形として実施・成功することを最低限の目標として想定していたが、それを十分に超える成果を挙げることができた。

来年度以降も星学祭でのゼミ発表を継続していき、より良く改善していく、少しずつでもレベルを上げていくことを念頭におくと、次の点が課題として指摘できる。第1に、スケジュールを全体的に前倒しすることによって、より余裕を持った柔軟な対応を可能にすること、第2に、基本的には学年別のチームで作業を行う形式だが、チーム（学年）間のコミュニケーションや相互作用をより緊密に行ってそれぞれが高め合う体制を作ること、第3に、上級生が過年度の経験をもとに下級

生を指導することによってゼミ内でのノウハウの蓄積・継承を図るとともに、ゼミ活動における教員の関与の度合いを低くして学生の自主性を高めること、第4に、発表内容を少しでもレベルアップすること。

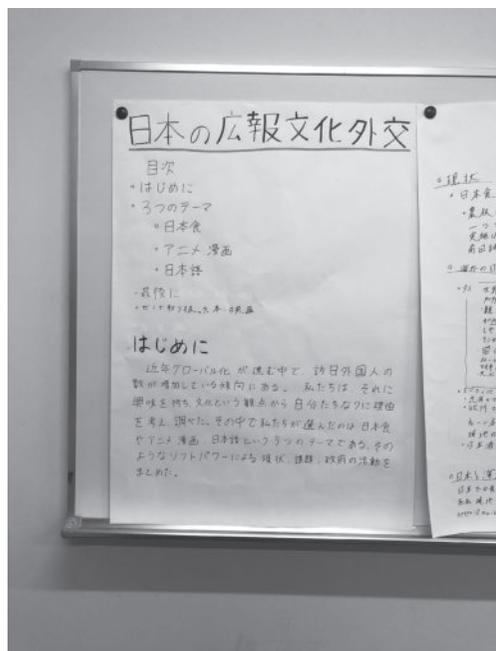
さらに、本稿では星学祭におけるゼミ活動発表に限定してその内容を報告しているが、当ゼミで考えているプロジェクト方式イコール星学祭発表(のみ)ではない。今後、さまざまな形式・内容の「プロジェクト」をゼミで実施していき、学生の学びへのモチベーションを高めるとともに、より良い成果を上げられるよう努力を続けていきたい。

〔注〕

- (1) アジアの中学・高校などの日本語教師や生徒のパートナーとして、授業のアシスタントや、日本文化の紹介を行うもの(独立行政法人国際交流基金アジアセンター「日本語パートナーズ」ウェブサイト)

<https://jfac.jp/partners/>

星学祭発表の様子(2年生チーム)(学生撮影)



星学祭発表の様子（3年生チーム）（学生撮影）

